
魔法少女リリカルなのはStrikerS 時空を越えた槍使い

八神刹那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 時空を越えた槍使い

【Nコード】

N0473BA

【作者名】

八神刹那

【あらすじ】

弟子を庇いその命を散らした如月玖音は何の因果か別世界ミッドチルダへ！そこで玖音は機動六課で働くことに。新たな道を歩む。だが、その世界には宿敵“紅き傭兵”、“殺戮の神”が牙を剥く！玖音は世界を覆う巨大な闇を打ち砕くことができるのか！？玖音の新たな戦いが今始まる！

これは魔法少女リリカルなのはStrikers

時空を超えし

二槍使い のリメイク版です！前作では描けなかった部分や訂正する部分を描きます！

プロローグ

ある世界に一人の“侍”がいた。

その男は戦えば最強の武人。策を練れば今孔明と呼ばれる男だった。

だが、その男は弟子を庇いその命を終えた。

男は4人の弟子にそれぞれ己が極めた“槍術”“剣術”“体術”“魔術”をできる限り伝えた。

残された4人の弟子は彼の意味を引き継ぎ一人前の戦士となった。

その男は戦場で“二刃の槍手”または“槍鬼神”呼ばれ仲間を助けた。

ある時は策を練り、ある時はともに戦い、またある時は1万の大軍をたった一人で引き受け戦った。

まるで英雄のような男だった。

その男の名前は 如月 玖音。 第十七代目の十三隊一番隊隊長である。

これは、その男が己を命を終えてからの物語である……。

第巻話 出会いと話し合い

次元世界ミッドチルダ。

古代遺物管理機動六課の医務室。ここで寝ていた1人の青年が目覚ました。

「・・・・・・・・ここどこ？オレ死んだよな？」

青年の名は如月玖音。玖音はしばらく唸りながら考えると

「ま、いいか！生きてるし」

と簡単に考えをやめベットから起き上がり勝手に部屋を出る。

部屋の外は何処かの建物のようなうだ。

「・・・・・・・・晃雲寺じゃないな完全に・・・・・・・・あそこは全部木製だし」

玖音は裸足で建物内を歩き回る。格好は患者着る患者服。一目で分かる格好だ。

「うーん・・・・・・・・。オレはサージエスのキリバチで斬られてそれからあいつを討つて、それからオレ粒子なつたよな？なんでこんな場所にいるんだ？」

また考える。すると目の前の通路から3人の少女が現れた。目が合う。

数秒間の沈黙。

ダッ！！

「「「あつ！？」「」」

玖音は本能的に逃げ出した。

「ちょ！？待ってや！！」

茶髪の少女が玖音を止めようとしたが玖音は逃げた。

「待って下さい!!」

「ケガしてるんですよ!!」

亜麻色の髪と金髪の少女が玖音を引き止めるが玖音は建物内を走る。
「こういうシチュエーションだとオレたいてい面倒ごとに巻き込まれるんだよね……」。だから、逃げる!!」

玖音はブツブツ言いながら走る。

玖音は約10分間走り続けた。2人の少女はまだ追ってくる。その前に玖音はまだ建物から出られずにいた。何度も同じ場所をグルグル回っている。

「止まってください!!」

亜麻色の髪の少女が止めようと叫ぶ。

「だってら追ってくるな!!追われたら本能的に逃げるだろ!!」

玖音がロビーを飛び降りる。

「なのは!バインド!」

金髪の少女が亜麻色の髪の少女に言う。

「うん!」

なのはと呼ばれた少女が玖音に向けて手をかざすと

キーン

という音とともに玖音の足に光の輪が絡まり着いた。

突然足を封じられた玖音は

「なっ!?ダァー!!」

派手に転んだ。

「な、なんじゃこりゃ!?!」

玖音は両足に絡まっている光の輪を外そうと必死になっている。

「それは力じゃ解除できませんよ」

2人の少女が玖音の前に立つ。

「逃げたりしなければ名にも危害を加えませんか」

そこにさっきの茶髪の少女がやって来る。

「私たちは何にもしませんから。貴方のことを教えてくれませんか？」

「・・・そんなことり腹減った」

玖音が言い切った。

「「え？」」

3人はまさかの言葉にア然と親しい。

20分後。

「イヤー。腹減ってから助かったわ」

玖音は機動六課の食堂で少し遅い昼食を食べた。

「かなり食べましたね・・・」

「カツ丼、天井に鰻重・・・それに餃子まで・・・」

それから5分後。

「私は機動六課部隊長の八神はやてです」

と茶髪の少女が自己紹介する。

「高町なのは一等空尉です」

次に亜麻色の髪の少女が。

「フェイト・T・ハラウン執務官です」

最後に金髪の少女が自己紹介する。

「オレは如月玖音。十三隊の一番隊隊長だ。それよりここはいつた
い何処なんだ？さっきミッドチルダとかじくー管理局とか言う単語
が聞こえたけど。てか、オレはなんでこんなところにいるんだ？」
と玖音が3人に質問する。

「やっぱり次元漂流者やな……」

「ジゲンヒョーリユーシャ？」

「はい。まず今如月さんが置かれている状況を説明しますね」

それから10分ほどはやて、なのは、フェイトの3人が玖音の置かれている状況を説明した。

話を聞いた玖音は腕組みをし

「ようするにここはオレがいた世界とは違っってことか……」

「

「そうなりますね。如月さんがいた世界が見つかれば帰ることはできますので安心してください」

とはやてが言うと

「ああ！それはしなくていい」

と玖音が言い切った。

「な、なんですか？」

なのはが尋ねる。

「なんでって……ちよつとイロイロやらかしたからな。帰りたくないんだ」

「じゃあ。これからどうするんですか？」

「どうするって……オレが持ってた刀が2本あったろ？それ使って傭兵でもやって暮らす」

「如月さんは戦い慣れているんですか？」

「まあな。元の世界で13年戦っていたし」

玖音の言葉にはやては少し黙り

「だったらお願いがあるんですけど。聞いてくれませんか？」

「お願い？」

「はい。ぜひ如月さんの力を貸してください！」

はやてはそう言うと頭を下げた。

「ちよつ！？はやて！？」

「はやてちゃん!？」

それを聞いたフェイトとなのはが驚く。

「如月さんの話を聞く限りだとあまり野放しにはできないしそれにこの世界で傭兵するは大変ですよ」

「そうなの？だったら良いけど」

しれつと言った。

「い、良いんですか？」

なのはが聞く。

「うん。別に構わないよ」

「簡単に決めたね……」

フェイトが呆れる。

「ただし、少し条件がある」

「条件？」

「条件って言っても部屋と賃金はちゃんと払うってこととこの部隊の設立理由を教えてください」

「最初の2つは約束できますが設立の理由は今はちょっと無理なんです」

「まあ、いいけど。あと、オレの刀返して」

「刀は隊舎を案内するときお返しします」

「わかった。最後にオレのことは玖音って呼んでくれ。オレも名前で呼ぶから」

「そうですか。よろしくな玖音さん」

「よろしくね」

「よろしく」

3人がそれぞれ挨拶した。これが玖音の新たな戦いの始まりだった。

第式話 機動六課

4人は話し合いが終わり玖音ははやての案内で機動六課の隊舎を見学していた。

「へえー、なかなか設備が整ってんじゃん」

玖音は機動六課の設備を見て感心する。

「まあ、イロイロ訳ありの部隊やから」

「へえー。オレは構わないぜ。訳ありつのは。次は？」

「次は玖音と一緒に戦うフォワード4人の訓練を見学しに行こうか！」

はやての後を付いていくと島に廃墟が広がっていた。

「おいおい。廃墟があるぞ………」

「あそこが機動六課が誇る自慢の訓練場や。あれは実体のホログラムなんよ」

「オレのいた世界のいた魔法とは勝手が違うな」

「玖音さんのいた世界の魔法ってどんな感じやったの？」

「……その話はまた今度な。今する話じゃない」

その時の玖音の表情はどこか暗かった。

2人がフォワード4人に教導しているなのはに近づくと

「あつ。はやてちゃん。玖音さん」

「なのはが教えてるのか？」

「うん。わたし教導官だから」

「ふーん………」

玖音は丸い機械を相手にしている3人の少女と1人の男の子を見る。

「……あの4人がフォワード？」

「うん」

「若いな……」

「そういう玖音さんは何歳なんや？」

「23歳。はやて。聞いてなかったけどオレは前線で戦うだろ？ 仕事の内容は？」

「それは夜説明する予定なんよ。簡単に言えばあの4人が戦ってる丸い機械“ガジェット”って言うんやけど。それを倒したりすればいいんよ」

「なるほど」

玖音が納得しているとフォワードの訓練が終わり3人の元にやって来た。

「はい。みんなお疲れ様」

なのはが言う。4人は声をかける。青い髪の15、6歳の玖音に気がつき

「なのはさん。この人誰ですか？」

それに気がついたオレンジの髪の少女が

「確か3日前にフェイト隊長が運んできた人ですよな？」

「そうや。玖音さん自己紹介して」

はやてに言われ

「オレは如月玖音って言うんだ。明日から機動六課で働くことになったんだ。よろしく」

玖音が自己紹介する。

「じゃあ4人も自己紹介しようか。ティアナから」

なのはに言われオレンジの髪の少女が

「ティアナ・ランスター二等陸士です」

次に青い髪の少女が

「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

と元気な声で自己紹介する。

「エリオ・モンディアル三等陸士です！！」

赤い髪の男の子がスバルに負けなくらい元気な声で自己紹介する。
「き、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です。この子はフリードって言います」

最後に桃色の髪の女の子が自己紹介する。それに応じて隣にいた小さな竜が

「キュピーー！」

と声をあげる。

「玖音さんは4人と同じで前線で働いて貰う予定なんよ
はやてが言う。

「じゃあ。そろそろ訓練再開しようか」

「……はいっ！」「……」

なのはの一言で4人は訓練に戻っていく。

玖音とはやてはしばらく訓練再開を見学することにした。

「へえ、なかなか粒が揃ってんな」

玖音が4人の訓練を見て関心する。

「そうやる4人とも未来のエースやからな」

「なるほど」

2人が話していると

「主。こんなところにおられましたか」

「はやて。コイツ誰？」

ピンクの髪にポニーテールの女性と赤いおさげの髪の女の子がやって来た。

「シグナム。こら！ヴィータ！初対面の人に失礼やろ！」

はやてが赤いおさげの少女を叱る。

「わりいわりい」

「確か3日前に運ばれて来た者ですよ」

「うん。如月玖音さんって言うんや。民間協力者として明日から前線で働いてもらうんや」

はやてが2人に説明する。するとシグナムが玖音が腰に差している刀に気がつき

「如月。それはお前の刀か？」

「ん？そうだ。オレの相棒みたいなもんだ」

と2本の刀を見せる。鞘に朱と蒼のラインが入っており柄にも同じ色の刺繍が入っている。

するとシグナムが

「主はやて。如月と模擬戦をさせていただけませんか？」

「あ！それ、あたしも言おうとしたのに！」

とシグナムとヴィータが言った。

「シグナム！？ヴィータ！？何言ってるんや！？玖音さんはつき起きたばかりなんよ！」

とはやてがその提案を拒否しようとするが

「べつにオレは良いけど？組み手みたいなもんだろ？」

と玖音がしれつと言った。

「玖音さん！？」

「決まりですね」

シグナムが嬉しそうに笑った。

「さっきの話だと不知火と時雨はデバイスってやつになったんだろ？だったら平気だ。それに実力もわからねえ奴に背中中は預けられねえしな」

玖音もやる気満々だ。はやてはため息をついて

「そこまで言うんなら模擬戦は許可するけどケガだけはしないようにな。後、これは玖音の実力テストも兼ねてるからな」

と言った。

「ありがとうございます。如月。私かヴィータのどちらと戦う？」

シグナムが尋ねる。

「ん？2対1で構わねえぞ」

と玖音がとんでもないことを言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0473ba/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS 時空を越えた槍使い

2012年1月10日23時45分発行